常々感じてゐたところであるが、本書によつて更に教へられた一二を擧げれば、從來民俗學に關する勞作には大體二つの型があつた。强ちこの學問のみに限らないが一は調査報告書、資料集であり、他はそれらの正當なる理解に基いてなされた論考である。われ〳〵の望むところは後者にあるのであるが、前者も共に重要な事業であることは言ふまでもないことである。併しながらこれらは屢々無批判に混同され、極めて頑迷な論法をもつて世に横行し、爲めに民俗學の發達を阻害して、他の歴史諸科學より低次的だとの誤解を生ぜしめるに至つてゐる。これは全く事に携る者の偏執な鄕土意識と資料そのものゝ親昵性による輕率な取扱ひとに基いてゐるのである。從つて一般には報告は報告として、本書の如く純粹な形態のまゝに取出されることが、學問を推し進める上にどれ程强力な且つ忠實な方法であるかを如實に示してゐる。

又民俗學の資料として知られるところは、飛び〳〵に點在してあり、著しく偶然に左右されてゐたと云へる。偶然は必ずしも非難さるべきではないが、恣意的に所在と形態とを示されても、それ自身の持つ歴史地理的な地盤を固めることが不充分であつたが故に、その上に築かれた民俗學が砂上の樓閣の如くに危ぶまれ來つたことは反省すべきところであつた。夙に地方的な統一ある調査の要請される所以であつたのである。さうした中に本書が山城を中心とする文化圈の劃地的な報告書の役割を果すべく現れたことは、一層意義あるものであると云へる。

たゞ望蜀の嫌はあるが、記述に精粗のあることは遺憾であつた。今日の民俗學は共同の財産として調査に必要且つ充分な項目が劃てられてある。これを顧慮されたならば、本書は一段と利用價値を高めたであらうと想ふ。（菊版四〇〇頁、五〇〇限定自費出版、四、五〇）（平山敏治郎）

## 滋賀縣八幡町史

### 滋賀縣蒲生郡八幡町編

近江八幡の地は古くは大島鄕と呼ばれ、近江國中に於いても最も早く開けたところであるが、平安の中期比牟禮八幡の社が勸請せられて以來、これを中心として莊園が發達し、中世の終に至つては商工業の興隆既に見るべきものがあつた。天正十三年豐臣秀次が八幡山に城を築き、城下に安土の町民を移し住まはせるに及んで、はじめて近世都市の形態をとり、德川時代に入ると共に蚊帳、綿織物、疊表等の商工業大いに榮え、所謂近江商人の本場としてその商人は關東奥羽より遠く北海道にまで赴いて活躍した。その結果そこに蓄積された資本はこの町を領有した朽木藩や尾張藩の財政の上に重要な役割を果した。明治以後近代的産業への轉換に立遲れた爲に、今日に於いてはむしろ地方の一小都市として、多く顧る人もないかの如くであるが、その歴史はわが國に於ける都市發達の一典型として頗る興味深いものがある。

今次、同町に於いて開町三百五十年を記念して編纂せられた町史上中下三卷、上卷は通說として、上代より現今に至るまで町の發達を記し、中卷は志表として、人文地理志、町政志、神社志、

寺院志、民俗志、文藝志、災害騒動志、人物志、年表等の諸志を收め、下卷は史料として本文に關係ある各種の文獻を蒐めてゐる。通計二千四百餘頁、吉田敬市、近松文三郎等多數編纂員の協力になるは勿論であるが、全編の體例とその大部分の記述は編纂主任福尾猛市郎氏の手になつたものといふ。地方史として要求される多方面の要望に應へんがため、その叙述も自ら一樣ではないが、編著の特に力を用ひられたのは、古代にあつては條里制と郷との關係や、莊園制の中に於ける神社（神職）の地位の問題であり、近世にあつては城下町の經營、惣年寄、年寄等による町の自治、商工業の株仲間の組織とその變遷、金融等の問題であつたかと思はれる。中卷の志表は多くは町の現勢に關するものであるが、それらの中にあつても町割の制度や古い水道等に關する記事はわれ〳〵にとつても特に興味深いものがある。

思ふに地方史の編纂は、編纂その事が既に勞苦多い仕事であるばかりでなく、外的にも種々なる支障や困難の伴ふものである。本書にあつてもその編纂始末を見ればその計畫が如何に古くよりあり、而して如何に多くの支障によつてその完成を妨げられてゐたかを知ることが出來る。然も福尾氏が一度その困難なる事業を托せられるや、比較的短日月にしてよくその功を竣へ、紀元二千六百年の輝かしき年に於いて美事その完成を告げられたことは洵に敬服に堪へないところである。（菊判三册、昭和十四年十二月——十五年五月刊、滋賀縣蒲生郡八幡町役場發行、非賣品）（柴田　實）

# 彙　報

## 昭和十六年度史學科　卒業論文題目

### 國　史　專　攻

元治の變を中心とし加賀藩勤王志士の動向及び藩の態度　厚見良夫
室町時代の末期に於ける庶民の社會生活　荒尾利就
幕末變革期に於ける民心の動搖　井狩忠之
近世後期に於ける自然科學的思想　池田正一
日本刀史と日本文化史　岩尾常幸
室町時代文化の一考察　大石良村
封建制度と町人　龜田雅也
古今著聞集と時代の思想（中世の說話集と時代の思想）　菅田慶介
中世佛教に於ける戒律思想　十河泰雄
近世國學の先驅　野口司
歐人來航に伴ふ世界的精神の展開　服部貞藏
日本國家と武家社會　水野優三
平田學派　南原五郎
幕末に於ける日本人間發展の一問題に就いて　美根道廣
飛鳥寧樂時代佛教彫塑の研究　毛利久